地域安全科学部門　危機管理・災害復興分野

震災経験の継承と「つながり」の再生

松井　克浩

1. はじめに

2004年の中越地震，2007年の中越沖地震と新潟県は連続して二度の大地震に見舞われた．またその前後には，水害，豪雪と災害が相次いだ．被災地では大勢の人びとが避難生活を経験し，地域内外のボランティアによる支援のありがたさも知った．こうした経験の中には，今回の東日本大震災の復旧・復興に，あるいは今後もまた予想される災害への対応に，生かされるべき点も数多く含まれていると考えられる．

本研究では，このような問題意識にもとづき，とくに「人と人とのつながり」という視点を基軸として，中越地震・中越沖地震の被災者と被災コミュニティの経験をたどった．それを，コミュニティやボランティア，ジェンダー，市民活動などのいくつかの角度から取り上げて，検討した．数量的なアンケート調査も実施したが，中心となるのは被災地でおこなってきた聞き取り調査・事例研究である．深刻な被害を受けた集落の再生に向けて苦難の道を歩んできた被災者，突然の災害に対応を迫られた町内会などの地域コミュニティや市民活動の担い手，行政や社会福祉協議会の担当者，原発事故の影響で福島県から新潟県に避難中の人びとなどさまざまな立場の方を対象に，聞き取りを実施した．

2.「つながり」の変容と再評価

中越地震の被災地では，阪神・淡路大震災の教訓もあって，避難所でも仮設住宅でも，集落の枠組みの維持がはかられた．被害の大きかった集落では，将来像を検討する場が集落ごとにもたれ，話し合いが繰り返されてきた．集落を現地で再建するか，それとも平場での集団移転を選択するか，具体的な再生計画をどうするか，などについて議論が交わされた．世代により，また家族構成や職業により考え方はさまざまだったが，「集落のまとまり」は議論の前提とされていた．その過程で，少数の，声の小さな意見が抑えられてきた可能性には，十分注意を払う必要がある．その一方で，この「まとまり」が，再生に向かう人びとの支えになってきたことも事実である．

都市部の地縁的なつながりは，町内会やコミュニティ協議会といったかたちで組織される．中越沖地震で被災した柏崎市は，コミュニティ政策に力を入れており，いくつかのコミュニティでは，それぞれ熱心な地域づくりの活動がおこなわれてきた．すぐれた地域づくりを進めてきたコミュニティ・町内会は，地震の際に優れた対応力を示し，地震後はその経験をふまえてさらに地域づくりを前進させていった．これらの事例に共通していたことは，このプロセスを意識的に進めることによって，好循環を築いていることである．地震によって，地縁的なつながりが多くの住民によっての再評価されたこともまた，好循環を後押ししている．

災害を乗り越えていく過程で，多くの人や団体が被災体験を対自化し，意味づけようと試みる．そこで，とりわけ重要なものとして浮かび上がってきたのは，人と人とのつながりだった．本研究で取り上

げてきた事例のすべてに共通していることは，災害をきっかけとして，つながりの捉え返し，再認識，再評価がなされたことである．何気なく営まれてきたかかわりが，意識的な意味づけの対象となり，重要な意義をもつものとして評価されるようになった．再認識された地縁的コミュニティと市民活動団体・ネットワークが重層化していくことは，より暮らしやすい地域づくりに結びつくし，それが結果的に災害に強い地域社会を可能にするといえるだろう．つらい体験である災害は，同時に地域のつながりを結び直し，よりよい社会を切り開くきっかけとなる可能性を秘めている．

3. 東日本大震災へ

中越地震・中越沖地震をくぐり抜け，「復興」に向けて歩んできた人びとの体験は，東日本大震災の被災地や被災者に対して，どのような示唆をもつのだろうか．

集落をはじめとする地域コミュニティのつながりを生かし，それを復旧・復興へ向けた支えにしていくことは，重要であろう．山古志でも十二平でも，それぞれ経過や条件は異なるが，いずれの住民も現在おおむねその選択に満足しているように思われた．その要因としては，両方の事例とも仮設住宅等で住民どうしの話し合いを繰り返し，一定の納得を得た上で事業を進めている点が指摘できるだろう．実態としてそのまま枠組みを保つことが難しくても，仮想的なものであれつながりを維持していくことができれば，個人の生活や地域を立て直す際の手がかりになる．

復興に向けた議論をしていくためには，地縁的なコミュニティの役割のみでなく，テーマ型・ネットワーク型のつながりを地域の中に育み，活性化させていくことも重要である．さまざまな性格のつながりが，地域の中に縦横に存在していることが，多様な議論と行動の活性化を促すだろう．

また，いずれのつながりにおいても，女性がその力を十分に発揮するべきである．これまでは，とくに集落や町内会などの地縁的団体において，女性はあまり活躍の場を与えられてこなかった．とりわけ，防災や災害復興といった局面では，ほとんど無視されてきたといってもよい．女性がリーダーシップをとれるような地域は，活力があり，風通しもよい．今後復興から防災･減災地域づくりにいたる過程で，どれだけ女性や若者の力を取り入れることができるかに，地域の将来がかかっているといってもいいだろう．

参考文献

1）松井克浩『震災・復興の社会学－2つの「中越」から「東日本」へ』リベルタ出版，2011
2）松井克浩「防災コミュニティと町内会」（吉原直樹編『防災の社会学　第2版』東信堂），2012（近刊）